



(左隻)

【洛中洛外図小屏風(らくちゅうらくがいずこびょうぶ)】

成立 江戸前期

大きさ たて106cm, 横281cm

3. 洛中洛外図小屏風

本図は、右隻に^{うせき}三十三間堂から知恩院に至る東山一帯を、左隻に^{せき}金閣寺から松尾大社に至る北山・西山を配し、名立たる諸処とそこに集う人々の風俗を描き出す六曲一双の小屏風である。

紙本着色の地には^{しほんちやくしよく}切箔が^{きりはく}蒔かれ、長くうねりながら^{ななび}柵引く金雲が画面の装飾化と空間の分割統合を担う。右隻の底部には鴨川が流れ、五条大橋を渡ると方広寺大仏殿がみえる。金雲を隔てたその先には、桜の咲誇る豊国廟と清水寺が並び、八坂の塔・松原を経て祇園社、そして歌舞伎小屋が立ち並ぶ四条河原に至る。左隻では、秋景の天龍寺・釈迦堂といった嵯峨・嵐山の寺院を点景に、六扇に渡って北野社が大きく展開する。

京の名所と風俗を描く屏風絵としては、「洛中洛外図」をはじめ、地域や描写主題を限定した「京名所図」があげられる。本図の場合、左隻では北野社が、一方右隻では祇園社と四条河原が大きく扱われることから、北野と祇園を対にした「京名所図」の流れをくむものとも解し得る。しかし、各隻の描かれた景観の広がり、北野・祇園の遊樂の様子に華やかさを欠くことを鑑みれば、本図はむしろ、「洛中洛外図」のパリエーションの一つであると考えられよう。

本図の小屏風という作品形態や切箔が蒔かれた地の処理、形式化した町屋表現など、作品の成立契機を考える上で、本図が元来仕込絵であった可能性は否定できないが、興味深い図様もいくつか見られる。まず、北野社の回廊に囲まれた社殿前では^{ゆたてかくら}湯立神樂が行われている(挿図1)。北野社と湯立神樂というモチーフの組み合わせは、他の洛中洛外図では類を見ず、注目すべき図様といえる。また北野社頭に歌舞伎小屋が描かれず、^{こんのばば}近馬場での^{くらべうま}競馬が大きく扱われていることも特徴だろう。さらに、^{おおいがわ}大堰川に^{とげつきょう}渡月橋ではなく渡し舟が描かれている点や歌舞伎小屋での演者の姿態が「^{かんぶん}寛文美人図」に通ずる点も興味深い(挿図2)。制作年代や^{ふんぼん}粉本の問題に関わる論点となろう。

(本学院生 上野友愛)



(挿図1)



(挿図2)

